

出題分析		
試験時間 90分	配点 75点	大問数 5題
分量 (昨年比較) [減少 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 増加 <input type="checkbox"/>	難易度変化 (昨年比較) [易化 <input type="checkbox"/> 同程度 <input type="checkbox"/> 難化 <input checked="" type="checkbox"/>	
【概評】 大問数が5題、設問数が39問（選択問題が38問、英文要約問題が1問）という例年通りの構成である。各大問の英文の分量は昨年度と同程度。大問Ⅰの適語補充問題、大問Ⅱの内容一致問題、大問Ⅲの適文補充問題、大問Ⅳの対話文空所補充問題、大問Ⅴの英文要約問題という構成に変化はなかった。大問Ⅳは問われる表現が標準的で易化した一方、大問Ⅰ、Ⅱには抽象度が高く難解な文章が多く配置されており、全体として昨年度より難化した。		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	適語補充問題 A「トースターに見る標準化とそれに伴う哲学的問題」 B「『意見』の持つ公共的性質」	A・Bともに、文章中の7つの空所に適切な語を補充する問題である。Aは文章の内容が難解で、選択肢の吟味が困難である。Bは一部の選択肢に難単語が見られるものの、取り組みやすい題材の文章である。コロケーションの知識と、空所前後の内容を正確に把握することが求められる。	難
II	内容一致問題 A「グラミン銀行の貧困対策」 B「ポピュリスト・ナショナリズムの台頭と多文化主義」 C「よりよい世界を夢想する母」	A・Bは短めの文章、Cはやや長めの文章を題材に、設問文に続く一文を選ぶ問題と、設問文に対する答えとして最も適切なものを選ぶ問題がある。パラグラフや文章全体の趣旨を問う設問もあり、総合的な読解力が求められる。Cは英文が難解で解き進めにくく、さらに一部に解答の根拠を見つけにくい設問も存在したため、受験生の負担が大きかったと考えられる。	難
III	適文補充問題 「ガスライティングについて」	長文中の空所7か所に英文を補充する問題で、選択肢は8つある。選択肢が1つ余るので紛らわしいが、空所を上から順に埋めるよりも、答えが選びやすいものから解答することで取り組みやすくなるだろう。	標準

設問別講評			
IV	対話文空所補充問題 「プレゼントについての会話」	対話文中の空所7か所に適切な語を補充する問題で、選択肢は13個ある。対話の状況は想像しやすいものであり、選択肢にも難単語は見られなかった。	易
V	英文要約問題 「理性に対する認識について」	250語程度の英文を要約する問題である。例年同様、解答欄に書き出しが与えられ、それに4語～10語を加えて文を完成させる形式であった。文章の内容は標準レベルだが、要旨を正確に把握し、制限語数内で要約を作成するには、高い読解力と作文力が求められる。	標準

合格のための学習法

文化構想学部では例年、英語の文章を要約して一文にまとめるという問題が出題される。課題文の要旨を的確につかめるよう、普段から文章の構成を意識して読む習慣をつけてほしい。この要約問題を含め、文章の題材は人文科学系から自然科学系まで多岐にわたる。焦らず取り組めるよう、様々なジャンルの文章に触れておくとよい。空所補充などに難問が出題されることもあるが、そうした難問を正解しなくとも、それ以外の標準的な問題を確実に得点できれば合格は可能である。安易なテクニックや不確かな知識に頼るよりも、まずは標準レベルの文法・語法・語彙を確実に身につけ、自分のものにしておくことが大切である。